天歩
2026年
5月
No.205

懇親会では地域協同組合無茶々園の現代表理事・元代表理事・創設メンバーが揃い、鏡割りを行いました。また、南予名物であるじゃこ天の実演披露や地元の食材を使った手作り料理を提供。無茶々園らしい懇親会となりました。

50周年記念式典を開催しました

去る4月16日（木）から17日（金）にかけて、無茶々園の50周年式典を開催しました。最初に伊予柑の無農薬栽培実験園を作ったのが1974年ですので、正確には52年目にあたりますが、このあたりの大雑把さもひとつの無茶々園らしさ。ともあれ、およそ半世紀を経て、紆余曲折や複雑な分岐を経て現在にたどり着き、こうして式典の開催を迎えることとなりました。

全国から200名の参加

今回の式典では、生産者やスタッフなど関係者のほか、およそ200名のご招待者の方に参加していただきました。日頃から私たちの産物を取り扱っていただいている生活協同組合をはじめとした販売先、運送や資材調達など身近で支えてもらっている地域の仕入先や、環境保全型農業や産直にともに取り組んでいる農業者など、北海道から九州まで、全国からお客様をお迎えしての開催となりました。

手作りの記念式典

一般的に、大人数が参加する周年式典の開催は、ホテルやイベントスペースなどの大きな会場を借りて行われます。結婚式や葬式も昔は自宅や地域で行うものでしたが、今では専門の式場を使うのが当たり前。そんななかでも、無茶々園の50周年式典は、いま事務所を置いているかりえ笑学校（旧狩江小学校）を会場として、準備から後片付けまで、まさに手作りで開催しました。

無茶々園のこだわり

無茶々園のある西予市明浜町は小さなまちです。観光地でも交通の結節点でもないので、そもそも大きなホールや宿泊場所が揃うような、イベント開催で頼れる施設が近くにありません。それなら今回は大きな会場がある都市で行っては、との（冷静な）声もありました。しかし、せっかく集まってもらった方々に、明浜の段々畑や海を案内し、生産者やスタッフと顔を合わせてしっかりと交流したい。印象に残る体験としてもらいたい思いで、やっぱり最後には、利便性よりも地元での開催にこだわりました。これもまた無茶々園らしいところです。

スタッフ総出で準備

考えなければいけないのは会場だけではありません。宿泊先に移動手段、懇親会や見学会に、さまざまな展示や記念誌の作成など、整えなければいけないことは山ほどありました。事前の準備や当日の対応には、生産者もスタッフもほとんどみんなが当事者として何かには関わることになります。9年前の40周年でも、21年前の30周年でも、毎度総出で臨んできたのですが、およそ10年に1回、大掃除でもするように、この2日間にエネルギーを注ぎこんでいます。

式典のテーマ

さて、もうひとつ大事なのは式典の内容です。前回の40周年は農林水産祭むらづくり部門（みかんづくりではない）で天皇杯を受賞した直後でもあり、純粋にお祝いの要素が強くなりました。対して、50周年といえば半世紀の大きな節目です。自然と次の50年、創設から100年が意識にのぼり、未来を考えることがテーマとなっていきました。

式典では、「ビジョン・ミッション」を語るパートを設けました。ビジョンやミッションは、無茶々園がこれからどこへ向かうのか、その考え方を言葉にしたもので、世の多くの会社や団体でも整備されています。これまでも相応の表現はあったものの、体系としては整理されておらず、この機にビジョン・ミッションのかたちにまとめなおすよう、式典の準備と平行して進めてきました。

1年間の時間をかけて

作成作業はこれも大変な労力のかかる工程でした。いま無茶々園に関わっている様々なメンバーにとっての納得感が得られるように進め、素案の作成から、説明会や意見収集などに多くの時間をかけ、議論を重ねて作っていきました。こうした経緯や苦労のエピソードから、最終的にとりまとめたビジョン・ミッションの案内とそこに込めた思いや考えについて、式典のなかで紹介しています。

若者のトークセッション

また、いま無茶々園の近くにいる20代の若い世代が、次の50年にむけて自身の考えを語るトークセッションも行いました。高校から農業を学び明浜へ戻ってきた農業後継者、紆余曲折の末に明浜にたどり着いた地域おこし協力隊、創業世代の孫であり起業家でもある学生と、明浜に縁のある3人がそれぞれの考える未来をしっかりと言葉にしました。

創設時には、当時20代だった若者がはじめた実験的な取り組みでした。創設から今日までつながってきた取り組みも、そろそろ直接顔を合わせることのできない世代に引き継いでいく頃合いです。50年経ったいまでも、こうして若い世代が前に出て発言する環境自体が、また無茶々園らしいところかもしれません。

会員の皆様へ

準備と運営のために生産者やスタッフが関わり、多くの参加者を迎えて、この小さな集落でお祭りのような非日常と一体感を作り出した式典でしたが、まだまだやり残していることもあります。この式典では、どうしても会場や宿泊の都合もあり、この天歩をご覧になっている個人会員の皆さんをお誘いすることができませんでした。

次の50年も、日頃から無茶々園を支えてくださっている皆さんとともに歩んでいくものだと思っています。50周年は式典限りではなく、今回ご招待が叶わなかった個人会員の皆さんとも、この一年をかけて、あらためて交流の機会をつくっていきます。天歩等であらためてご案内いたします。どうぞご期待ください。

1 記念式典の様子。

2 選果場視察の様子。視察では段々畑・青のり養殖場・選果場の視察会を行いました。

3 視察後の昼食交流会の様子。生産者、スタッフと視察参加者で感想交換を行いました。

50周年アートギャラリー

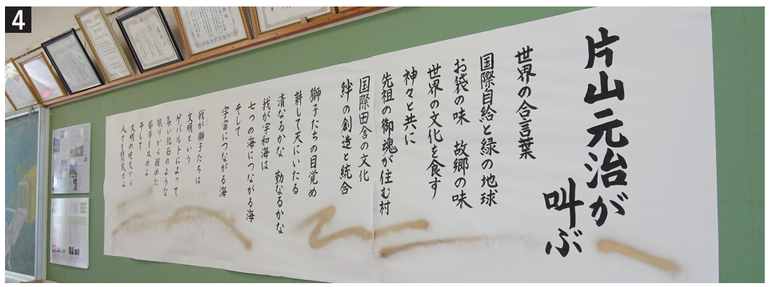
50周年記念式典では、式典や記念誌の作成、交流会（余興）だけでなく無茶々園らしい趣向をこらした展示が多々ありました。創設者片山元治の心の叫びを揮ごうした書や、黒板アートに無茶々園映画部の活動報告。無茶々園に縁の深い二人のカメラマンの作品展と無茶々園と同じく旧狩江小学校内に事務所を構える「木づかい工房」の木工作品。そして「無茶々園アートギャラリー」と題し畦地梅太郎とポップアートを牽引したリキテンスタインとアンディ・ウォーホル、そしてバンクシーの作品も展示し多くの方にご覧いただきました。

なぜ無茶々園に

なぜこのような美術作品が無茶々園に・・・？畦地梅太郎作品は佐藤和文（佐藤真珠）が長年にわたり収集したもの。そしてバンクシーなどの作品は福祉事業を通じて出会ったコレクターの方のご厚意によりお借りしたものです。実は、バンクシーに関しては「所有している作品を生かした社会貢献ができないか」というお声をきっかけに、2024年2月から社会貢献事業の一環として市内の学校を中心とした鑑賞会を開始しています。徐々に活動範囲を広げながら2026年3月までに約2000名の児童生徒・教職員・地域の方々にご鑑賞いただきました。

鑑賞場所は各学校によって様々で、図書室や会議室、体育館に児童の作品と一緒に並べての鑑賞会となったことも。神出鬼没のバンクシーよろしくそれぞれの場所や状況に応じた鑑賞の機会が生まれています。作品を間近で見ることができ、作品への感想や疑問をその場で自由に言葉にできること。美術館や通常の授業ではなかなかできないこの経験が、子どもたちが文化・芸術へ興味をもつきっかけになることを願っています。

今回は「バンクシーの作品を実際に見て詩を制作する」という国語の授業で完成させた高校生の詩も掲示しました。バンクシーの作品 × 高校生の感受性。どの作品からインスピレーションを受けたのか、見る側の創造性がさらに深まるギャラリーとなりました。皆さんにお声がけする際も展示を予定しております。ぜひ楽しみにしてくださいね。



1 以前行った、小学校での展示会の様子。この日は学校内の和室での鑑賞会となりました。

2 無茶々園映画部によるレビュー展示。来園者の足を止め、思わず見入ってしまう力作の数々が圧巻です。

3 愛媛県南予地方の誇る版画家・畦地梅太郎。力強くもあたたかな作品が数多く並びました。

4 生産者の中川裕子さんによる片山元治の想いを力強く表現した作品。

5 アートギャラリーの看板は木づかい工房・酒井久夫さんの作品。

1 記念誌の制作は、40 周年以来、10 年ぶりの取り組みとなりました。

2 写真やイラストをふんだんに取り入れた、視覚的にも楽しめる構成となっています。ぜひお買い求めいただければ幸いです。

50周年記念誌をつくりました

無茶々園が生まれてから、50年以上の歳月が流れました。その節目にあたり、私たちの歩みを一冊にまとめたのが「MUCHACHA MAGAZINE」です。

この記念誌は、よくある周年史のように出来事を年代順に並べただけのものではありません。無茶々園をさまざまな角度から切り取り、雑誌を読むような感覚で楽しんでいただける一冊を目指しました。編集には、事務所スタッフだけではなく生産者も参加。いつもデザインをお願いしている株式会社ERIMAKIとともに制作を進めました。無茶々園のことをよく知る方にも、まだあまり知らない方にも、それぞれの入り口から読んでいただける構成にしています。

表紙を飾るのは、宇和海を望む段々畑と柑橘の風景の力強いイラスト。まずは無茶々園の営みを支えてきた明浜の自然を感じてください。誌面では、無茶々園の取り組みや歴史を振り返りながら、有機農業の実践、産地づくり、地域との関わりをどのように積み重ねてきたのかをまとめています。Q&Aや年表、出来事を振り返る企画も盛り込み、はじめて手に取る方にも全体像が伝わるように工夫しているのもポイントです。

また、みかん生産や明浜のことだけにとどまらず、海の生産者の取り組み、地域づくりの仕事、福祉の現場、日々の暮らし、さらにはベトナムでの活動まで幅広く取材しました。農家、漁師、販売、福祉など、老若男女さまざまな立場の人たちに話を聞き、無茶々園が単なる農業生産者の団体ではなく、多くの人の思いや仕事がつながって成り立っていることを意識して描いています。

そのなかでも特に大切にしたのは、「人」が見える誌面にすること。畑で働く人、海で働く人、選果や加工を担う人、地域の暮らしを支える人。それぞれの言葉や表情から、無茶々園の50年が一人ひとりの積み重ねの上にあることが伝わるはずです。あわせて、明浜の風光明媚な景色や現場の空気感を味わっていただけるよう、写真も贅沢に使っています。

50年を振り返る記念誌でありながら、過去を懐かしむだけではなく、これから先へ何をつないでいくのかを考える一冊でもあります。ビジョンや理念だけが未来へ残るのではなく、それを生んだ人の迷い、痛み、葛藤、そして倫理的な逡巡までもが、後の時代を生きる人たちに伝わっていけばと願っています。無茶々園のこと、明浜という土地のこと、そこで生きる人たちのことを、少しでも身近に感じていただけたらうれしく思います。